

子供の残酷性

文學士 寺田 精 一

子供には子供に特別な色々な性質があるが、それ等の性質は或は教育の力により、或は彼等を取圍んで居る人々の種々なる影響感化によつて、其社會生活に不必要な、不適當なものゝ弱められ、または全く却けられ、必要であつて適當なものが、次第に助長せられ、又は益發擡ざるゝやうになるのである。自然淘汰の結果色々な生物が、何れも其圍繞界に適應し得るものゝみに限られ、適應しないものは皆滅びてしまつて、若し外界に何等か變化が起つて來ると、その中に生存して居る生物は、何れも之れに適應するやうに務めて居る、けれども不幸にして適應することの出來なかつたものは、次第に勢が衰へて、遂には此世の中から取り去られなければならぬ境遇となるのである。子供の時に現はるゝ色々な性質も、自然界に於ける生

物のやうなものであつて、捨て、置いても或度迄は、其社會に適當する性質が發達するけれども、時には後に至つて恐しい結果に陥つて、罪のない可憐な子供に憂き目を見せなければならぬ性質もある。他の植物などであれば、枯れてしまつたとて、衰へて來たとて之れ丈けのものであるが、人の子供であつては我關せずと平氣で居るわけには勿ゆかぬ、悲惨な哀れな境遇に至らしめないのは勿論、苟も少しでもかゝる不適當な傾のある性質などは、未だ之れが發達して力強くならぬ前に處置しなければならぬ、一方に於いて人生に必要な性質を助けて行くと共に、此不適當な性質を抑へて行くのが即ち子供の教育である。云ふまでもなく子供の時は何れの性質にせよ、未發達な幼稚な若々しいものであるから、子供の中に矯正するのは最も容易であると共に、若し其道を誤るときには好ましからざる性質を得せしむるのも、極めて容易であることに注意しなければならぬ。吾人が

今述べやうとする残酷性なども、子供の時代によく見られることであつて、望ましくない性質であるから、若し子供にかゝる傾があつたならば、これが矯正には力を盡さなければならぬ。

子供に於て見られる残酷性も、これをよく考へて見ると決して單純なものではない、その依つて來るところには色々あつて一概には云へない、であるから子供の養育者はよく其場合に應じ、充分の思慮を以て之れに對しなければならぬ。子供に残酷性として現はるゝ場合は、普通は植物や動物殊に小さな動物に對して起るのであつて、これを捨て、置くと時には思はざるの結果に至ることがある。然らば子供の残酷性は如何にして起るか、其主なるものに就きて見れば、大畧次に擧ぐる數種である。

一。生物と無生物との區別を知らざるが故に起る場合。これは最も小さな子供に於て見られるところであつて、生きた物といふことを知らない、

春の暖さに若くしく萌え出でた庭の草花の芽も、啼き起いて居る蟲も、木の片や土塊と異つたことではない、手あたり次第に荊つたり潰したりして、喜んで居るので、玩具を弄んで居ると更に變つたことはない、従つて更に悪いことであるとは心づかない、脇から人に邪魔をされ止められた時に、何故に自分の邪魔をするのか、又何故に止められるのか解らない、であるからかゝる場合には、子供に生きた物の説明をしたとて勿論會得するとは、出来ない、そこで成るべく他の玩具とか何かで、注意を他の方へ轉じさせて、自然と一方遊びを忘れさせるやうにしなければならぬ。尤も此場合の残酷性は、生き物といふことが解つて來ると共に、自らよくないことであるといふことも解るから、極小さな子供に間、上の如きことがあつたとて、別に驚く必要はない、只此種の行爲が何時までも續かないやうに注意すればよいのである。

二。子供は運動するものに興味を持つて居る。玩具などに於ても子供は動くものが好きである、尤も動くものは人の注意を惹き易いものであるが殊に精神の未だ發達しない、極めて單純な子供には總べて動くものに注意し、これに興味を持つて居る、此動くものに興味のあるといふことから、小さい動物を弄んで楽しんで居る、かくて弄んで居る間には殺したり、傷つけたりすることも、自然と起つて來る問題であつて、此形式から一つの子供の殘酷性が現はるので、これは生物と無生物との區別を知らないやうな子供よりは、稍長した子供に於て見られるところであつて、此種のものには時に可成大きくなつたものにも見られることがある。只動くことが面白いのであるから、弄んで居る間に動かなくなつて、子供が泣き出すことなどがあつた、もはや死んでしまつた蟲を、動くやうにして呉れといふて、人を困らすことも折々あることである。かゝる場合には動くものを弄ん

で遊ぶので、別に可哀相であるとか、蟲が困るであらうかなどいふことには心づかない、幸小蟲を捕へて遊ぶ頃の子供は、年齢も稍長じて居るから充分云ひ聞かして、小さい蟲でも人におもちゃにされてはどんなに難義でどんなに粒くであらうか又思ふやうに遊べないから、どんなに困るであらうかなどと、子供の身に引き比べて教へてやらなければならぬ。

三。他のものに打ち勝たたい、何でも自分の思ふ儘にしたいといふ、生物の一般に有して居る慾望から、子供の殘酷性の現はるゝ場合がある。尤もかくの如き慾望は、極小さい時より現はれては居るけれども、年齢の次第に長すると共に、此慾望が著しく勢力を得て來て、小規模の生存競争の實現が見られるのであつて、同じ友達仲間に於ても、自分が大將になつて見たい、自分の號令に従はして見たいといふ慾望はあるが、動物に對しては殆んど無上の權力を以て臨み、殊に自分等の力

の及ぶ以内の小さな動物に向つては、恰も専制君主の如き考で自分の自由にしやうとする、數萬の蟻が隊を整へて動いて居ると、何となく皆動かぬやうにして見たい、石や木の片で止めて見ても止まらぬ、益勢よく進んで来る、今度は水を渡して防いで見る、尙進んで来る、そこで普通の手段では勝てないから、遂に非常手段を以て足で踏んだり、石や木で潰して其大方が散つてしまつたり、動かぬやうになつて初めて満足することが出来る。犬と競争して自分が負けると、今度逢つた時に杖で投つたり石を投げつけて逃げて行くのを見て喜んで居る。動かずに静かにして居る蛇や鳥などを見ると、走らしたり飛ばしたりして見なくなる、自分の思ふやうに急に動かないと、竿で衝いたり打つたりして、動き出し飛び出したので満足して居る。或は猫などが自分の思ふやうにならぬとて残酷にし、甲蟲や蛙などを動かぬやうにして喜んで居る。何れにせよかゝる場合は自分の思

ふやうになれば満足するが、それでないと承知しない、恰も玩具を我意の儘にしやうとすると同じである。而してかくの如きは十歳前後の子供に於て時に極端に行はるゝことがある、如何にも自分が小さい動物を思ふまゝにして、鬼ヶ島でも征伐した氣になつて居るやうなことがある、かくて此方面に一種の興味を覺ゆるやうになると、益此性質を助長するに至るから、平常彼等の近くにある人が注意を怠つてはならない。

四。動物を弄んで一種變つた運動をすることゝに興味を持つて、残酷性の現はるゝ場合がある動物を普通のまゝにして置いては更に面白くない少し手を加へ異常な動き方をせしめて、それを見るのを何よりの面白きことと思ふて居ることが子供には往々ある。例へて云へば蜥蜴の尾は脆く切れる、其切れた尾は暫くの間に跳返つて動いて居る、其動き方が面白いので蜥蜴を捜しては尾を切ることが、田舎の子供には行はれる。百足蟲は二

つに切るも三つに切るも、切り離れた體の部分
 が何れも勝手の方へ進んで行く、其別々に分れ
 て行くのを集めては歩ませて樂んで居る。蟻や
 蠶などの後足二本を捕へて、機織の眞似として妙
 な運動をせしめて喜んで居る、この時に子供の歌
 ふ歌もあれば、これが爲めに機織蟲といふ名まで
 出來て居る位である。これ等は極小さな子供には
 固より行はれないが、稍長じたものには屢見られ
 るところである、而してかゝることは自分で考へ
 出すといふよりは、寧ろ年上のものから教へられ
 て、初めて其惡戯を初める場合が多い、であるか
 ら小さな動物に接する機會の比較的多い田舎な
 どに於ては、殊に養育者に此邊の注意が必要であ
 る。

五。多少の工夫を加へて動物を弄ぶ場合。既
 に多少の工夫を施すといふのであるから、餘りに
 小さい子供では出來ない、十歳前後といふ惡戯盛
 りの時分に最も多く行はれるのである。例へば蜻

蛉の腹部を中途から切つて、細い草の莖や紙縲な
 どを差込んで飛ばしたり。龜の足に石の附けてあ
 る糸を結んで、脇から追つて歩ましたり。甲蟲な
 どの體へ長い糸を附けて放ち、茂つた木の枝に糸
 が絡み附いて、動けば動く丈益々動けぬやうに
 なるのを見て面白がつたり。雞の尾の先へ白い紙
 を附けて追ふときは、音がして後に白いものが見
 えるから、雞は何處迄も馳せ回つて止まない、そ
 れを後から大騒ぎして見て居る如きはそれである
 これは大抵の年上の者に教へられてするので、地
 方に依つて色々な方法があるので、中には甚だ殘
 酷な仕方もあつて、動物を全くの玩物となし、恰
 も草木の葉を取つて、色々な形を作つて弄ぶの
 と、殆んど撰ぶところは無い、而して處に依つて
 は、かゝることが一つの子供の遊戯として、更に
 怪まれずに普通の事として行はれ居ることがある
 勿論かゝる社會の一般の人は、只面白いことゝの
 み考へて子供に傳へ、其殘酷なる行爲であること

などには毫も心づかぬ場合も少くないのである。

六。復讎心から子供の残酷性が現れ出づること

がある。此場合には子供は明かに生物を生物として見て居る、決して土塊や石と同一視して居ないのである、尤も子供は生きたものも、死んで居るものをも、同じやうに考へて居ることは往々ある

無生物にも時には生きたものに對するやうな心持で居ることがある、例へば自分が倒れて體を痛めた石などに向つて、罵詈雑言して剩へ石を投げつけて初めて満足さるゝことなどは折々見らるゝ事實であるが却說此復讎心から來るものには又色々あるが、大別して此の四種あるものと見られる。

(イ)。無生物や草木を害したからとて、復讎的に動物に暴行を加ふる場合、自分の大切にして居つた草花を犬が荒したといふので、これに残酷な行爲をして自ら慰め、又自分が奇麗に作つて置いた

砂山などを蟻が壊したといふので、蟻といふ蟻を見當り次第敲き潰すといふ如きである。蟻の場合

の如くに例令自分の物に損害を加へなかつたものでも、之れと同じものであれば、何の見境もなく復讎をするといふ傾向がある。其外に自分には何等の關係もないが、只草や木が害されて可哀相だとて、草や木に同情して、之れを害した蟲などに復讐することも往々である。

(ロ)。他の動物の復讎をしてやるといふ場合、害された動物は力が弱くて、到底復讎をすることが出来ない、そこで同情心から子供が復讐をしてやるといふのである。例へば家に飼つて置いた雞を、野犬が來て殺してしまつた、それを見た子供は直ちに其犬を追つて、思ふ存分讐を取つてやるとか。又蛇が蛙を呑みかけて居るのを見て、直に其蛇を石や木で打つて、口から蛙を吐き出さしめ尙其蛇を殺してしまふなどは此類に屬するものである。かくて此場合に於て見らるゝ子供の暴行は一面甚だ残酷であるけれども、又他面に於ては美しい同情の念がほのめいて居る、然れども思慮

の足らぬ子供のことであるから、時に其善良なる心から出でた行爲が、程度を越えて却つて好ましくない結果に至ることがあるから、これ等の點は利用すべきは利用し、矯正すべきは矯正して、益善良な發達を期さなければならぬ。

(一)。自分の害された復讐をなす場合、前に云ふた通りに子供は自分を痛めた石をも怨んで復讐する、顔を突いた木の枝にも復讐をする、足へ登つた蟻や、首筋へ落ちて背中へ匍ひ込んだ甲蟲なども、時々潰したり半殺しにして報いる。殊に多少たりとも自分を害するやうなものであると、現在自分を害したのでもないのに、殺して以て一種の快感を感ずるといふのがある、況んや自分を害し傷つけたといふやうな時には、直ちに足で踏んで砂に擦り潰し、土の中へ埋めて尾や足のみを出して置いて喜んで居る。かくの如きことは人の普通の性質からも來るのであるが、往々にして子供の傍に附いて居るものが、かゝる行爲を教ゆるこ

とが少くない。

(二)。友達や親しい人が動物に害され、又は侵された時に自分から進んで其復讐をしてやるといふ場合。前に述べた自分の爲めの復讐も、稍年齢の長じたものに於て見られるところであるが、此他人に對する同情から復讐をしてやるのも、稍長じたものでなければ見られない、即ち多少社會上の經驗を得て、他の人との交際をするやうになり、同情心の漸く發達して來る時分に於て、明に見らるるところである。例へばお友達を刺した蜂を追つて殺したり、人の頭へ小便をかけた雨蛙を踏み潰し、吠えかゝつて驚した犬に石を投げつけて報いてやるといふが如き場合である。

七。恐怖の念より子供の殘酷性が現れることがある。極小さい子供に於ては、一般に色々な動物を見ても、恐怖の念を起すことは稀である、只動いたり走つたりするのに注意を奪はれて、却つて面白いものだと思つて居る。けれども其時期を経

過すると目新しいもので動くものなどには、往々にして恐怖の念を惹き起すことがある、元來人は本來の性質として、大きなものや勇ましい様子を居るものには、近寄らずに成るべく遠ざかりたいといふ念が自然にある、かくて人から教へて貰はなくとも、自ら進んで自己を保護するといふ傾向がある、その一面の現はれとして、子供が小さな動物などに對して、恐怖の念を起すといふことがある。元來人は恐怖の念に駆られる時には、所謂無我夢中の行爲をすることが少くない、幽霊のやうなものを見たとか、不意に人も通らぬ暗闇で、人に嚇された時などには、前後の考もなく殆んど無意識的に立ち振舞ふことが少くない、そのやうに子供の道などで、思ひも寄らぬ動物に出逢つたり、傍目もせず一生懸命になつて遊んで居る時に、不意に上の木の枝から毛蟲などが落ちて來て、子供を驚かすやうな場合には、固より驚いで逃げるといふこともあるが、男の子などである

と、恐しさの餘りにその動物を傷けたり殺したりすることがある、尤も驚かした復讐といふことも場合に依つては包含されて居るであらうが、他面に於ては恐しいものは成るべく近寄つて見たいといふ妙な好奇心がある、それと共にその恐しいものを多勢掛つても負してやり退ちてやりたい、かくて恐怖心から時々残酷な行爲を引き起すことがある。

八。厭惡心から子供の殘酷性の起る場合がある見苦しいものは誰が見ても心地よくはない、形の奇妙なもの、色の醜なものなどは、誰も近寄りたくない。既に動物の方でも保護色といふて、成るべく他の動物の毀害を受けないやうな色に出來て居る動物が少くない、この中には己の四圍と同じやうな色をして、一寸注意を惹かれぬやうなものがあるが、又中には如何にも毒々しくて、一見悚然とするやうなものがある、殊にかの爬蟲類などには此種のものが多い、蜥蜴、守宮、蛇などは大抵

の人が見て心持がよくない、此見苦い心持がよくないといふところから、これ等のものをむぎ／＼と潰したり殺したり、土へ埋めたり水へ沈めなければ安心が出来ない、氣がすまないといふことがある、これは強に子供のみに限らないけれども、これが子供に於ては遊戯的に最も露骨に現はれるのである。

九。他の子供のして居るのを模倣して、残酷性の起ることが又少くない。普通にははるゝ如くに子供は極めて感受性が強く、暗示に感ずることが容易であつて、他人の行爲を模倣するといふ傾向が殊の外に著しく見られる。その爲めに善いことをも模倣して覺えるが、悪いことをも模倣することが甚だ多い、本來快活な元氣の盛にある子供などに於ては、真面目な善いことよりも、悪戯なことの方が受けがよい。従つて愛らしい草木の花や芽も、小さい力ない動物などでも、只人のするところを模倣して自分には何等の動機もなかつた

のに、撈つたり殺したりする場合が屢ある、然し初にはかくの如く無意味に行つたのが、遂にそれに興味を覺えて來て、今度は自ら進んで行つて人をも誘惑するに至ることが常である。かくの如く子供には模倣といふことが、著しく力強く働いて居るから、子供の悪しき性質の遊びには、余程他より注意をしてやらなければならぬ。殊に動物を害してはよくない、生き物を苦しめてはよくないといふ考の附かない時分には、お友達にして居ることを見て、只玩具や小石などを弄ぶのと、少しも變らないやうな氣になつて、残酷な行爲を初めることが小さい子供には多いのだから、物事の稍解さるゝに至るまでは、一しほの心遣りが必要である。

十。自分の勇氣を示したいといふ慾望から、残酷性の起ることが稍年齢の長じた悪戯盛りの子供には屢見受けられる。人は蛇を恐しく思ふけれども自分は少しも恐くはない、此通りだと得意にな

つて蛇の頭を石で打碎き、或は守宮や墓なども何でもない、下駄で踏んでしまへばそれ切りだなどと云ひながら残酷なことをなし、或は自分今日蛇を幾匹殺したから偉いだらうなどと、得々としてお友達などに語つて居るのがある。これ等も若し此儘の考で發達して、残酷なことをするのが、勇氣があつて偉いのだといふやうになると、時には成長した後にて思はざる誤に陥らぬとも限らないから特に心を用ゆべきである。元來亂暴な粗暴な性質の子供は、固より亂暴や粗暴は残酷性とはことがあるので、固より亂暴や粗暴は残酷性とは同じ物ではないが、稍もするとこれに傾き易い場合があるのである。

以上は子供の残酷性の起る場合を概略述べたに過ぎないが、茲に注意すべきはこれ等の一若しくは數個の場合から、力弱き生物に對して残酷なことをすることを覚え、これに興味を持つて遂には習癖となることである。かくの如き習癖は主に下等

な動物に對して起るのであるから、別に兎や角い云はなくてもよいやうであるが、實際はかくの如き習癖が身體の成長と共に、次第に大きな動物に對して残酷なことをしても、さしたる哀憐の情も起らず平氣で居らるゝやうになり、終には人に對しても残酷な行爲を敢てするに至るのである、下等な動物に哀憐の情のあるやうな人は、通則として人にも優しい心立のあるものである、人に向つて同情のないやうな人は、動物に向つても思遣りのないのが普通である。

次に向一つ注意すべきことは、かゝる子供の残酷性の如きことが、一種の競争に依つて益強められ益其範圍の廣めらるゝといふことである。人が蟻を五匹潰したと云へば、自分はそれよりも多く潰して見たい、人が甲蟲などを二つ捕へて糸に縛りつけて居ると、自分はもつと澤山を捕へて見たい人が蚯蚓を殺したといへば、自分は蛇を殺して見せてやりたい、といふが如き競争心が此場合にも

行はれる、かくて次第に残酷性の發展するやうな

ことがあつてはならないのである。

或人は子供の残酷性は生れながらにあるもので、別に説明の限りではない、現に人類の未開の状態にある野蠻人などは、日常色々な残酷なことをして居る、人を殺して其肉を食ひ、多數集れる真中に於て獸物を屠つて、其肉を片端から切取り、其流れ出づる血を啜りながら、歌を歌つて喜んで居るが如きは残酷な極みである、文明人の子供が生物に對して残酷なことをするのは、恰も知識や經驗が發達しなくて、野蠻時代にあると同じであるからだといふて居る。此説の眞否はさて置いて、子供に残酷な性質の現はるゝといふことは事實である、それには少くも上述したやうな色々な場合が大に力をなして居ること、思ふのである、従つて子供の養育者は其場合に應じて、適當なる處置を採ることに務めなければならぬ。

最後に附言して置きたいのは、都會の子供と田舎

の子供とに於て、此残酷性が色々異つた條件に司配されて居ることである。一面から見れば都會の子供は田舎の子供のやうに、小さな蟲とか其他の動物に接する場合が少いから、従つて今云ふところの残酷性の起るべき場合も多くないものと見られるが、又他面から考ふれば田舎の子供は都會の子供よりも、所謂自然に接近する機会が多く、色々な生き物に馴れ親しむといふことの自ら起ると共に、家畜等の爲めに動物に對する一種熱味ある人として最も望ましい美しい心情の、我知らずに涵養する、場合に富んで居るものと見なければならぬ。加ふるに都會殊に大都會の子供は、田園生活を享樂せる邊陲の子供に比して、市街に於て人に追はれ車に追はれ、伸びた寛やかな性質の自然と亡せ行くと共に、市街地に於ける子供の常として、其四圍の事物に依つて頻繁に刺戟され、従つて注意の散慢を來たすことの往々にして有り勝ちなるは、都會に於ける子供の教育者は充分の注意と顧慮とを以てしなればならぬ點である。